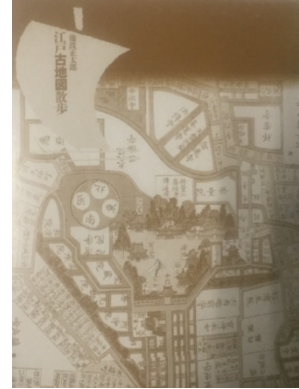


江戸古地図散歩

写真は池波正太郎の著作で、1994年に平凡社から刊行された。地図が好きなこともあり、江戸の風景を思い浮かべながら興味深く読んだ。冒頭の「いまはむかし、江戸と江戸人」から。



江戸開府のころから、寛永・明暦・万治の時代を経て、元禄のころから、町の性格も、しだいにととのってきたのであろう。さらに下って、安永から寛政・文化・文政の爛熟期に至り、その風俗の多種多様になったことは、当時を背景にして小説を書いている私など、「書いても書き切れぬ……」おもいがする。

古地図や浮世絵、黄表紙（そのころの風俗小説）さては、江戸音曲、歌舞伎などにより、辛うじて、当時のおもかげをしのびながら書いているのだ。それにしても、各種江戸古地図や、〔江戸名所図会〕、〔東都歳時記〕など、先人が丹念に、こころをこめてあらわした書物を手に取るたび、つくづく、「ありがたい」と、おもわざるを得ない。これら先人の恩恵なくしては、到底、私の小説は生まれなかったろう。

そして私どもは、江戸絵師安藤広重という偉大な存在によって、なおも、古き江戸の姿を慕わずにはいられなくなってくる。江戸の四季を、人びとを、雪の朝を、夕暮れの空を、広重の絵筆は無限の美しさをもって、「むかしの東京は、こうだったのだよ」と、私どもに語り聞かせてくれる。広重の木版画の色彩こそ、江戸の色彩だ。ひとくちに、これがこういうものだとはいえぬ色合なのである。

これは江戸の音曲についてもいえるだろう。たとえば、江戸長唄の〔吾妻八景〕をレコードで聴いてみて、テンポの速い三味線の前弾や、佃の合方、砧の合方などとよばれる三味線が奏でるメロディやリズムに、私は、暗い大川（隅田川）の、まんまんたる川面を行く舟や、船頭が唄う舟唄や、佃の沖に月光を浴びて浮かぶ荷舟の群れや、白魚をとる漁師たちの姿をおもいうかべてしまう。それは、ホーガイ・カーマイケルが作曲した〔星屑〕を聴いて、満天の星空が脳裡にうかぶのと同じことだ。

現代に辛うじて残されている、こうした風俗芸術のすばらしさに接すれば接するほどに、江戸古地図の紙面が立体化してくる。息づき、語りかけてくるのだ。そして、古い地図を手にして、現代の東京を歩むとき、おもいがけぬ場所に、「江戸を垣間見る……」ことができる。微かに、まだ、江戸が残っているのだ。日本の大都市の中で東京ほど、他国の政治家や実業家に喰い荒された都市はあるまい。それが日本の、東京の近代化であるというなら、何をかいわんやだが、日本橋の頭に高速道路を架けわたすにいたって

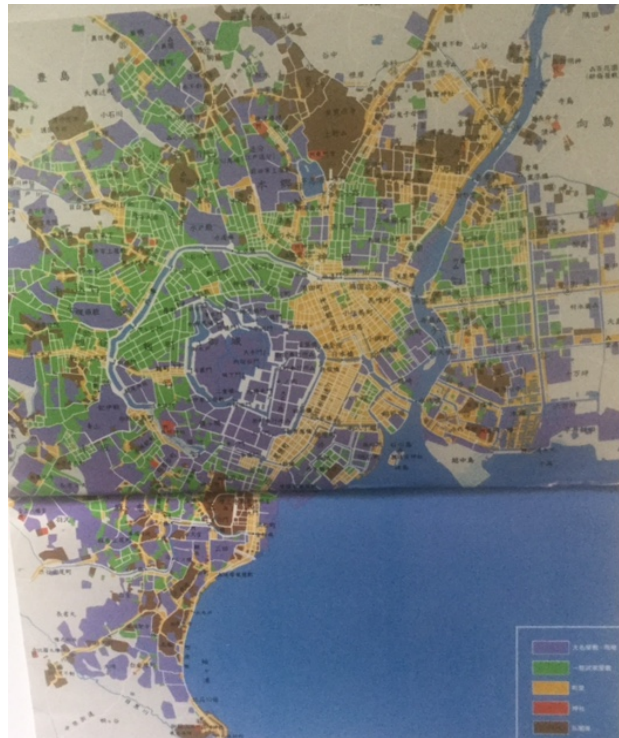
は、さすがの私も呆然とした。

俗に、「三代つづけば江戸っ子」などという。これは、大阪であろうが、新潟であろうが、三代住みついて、ようやく、その土地の、その町の暮しが身につくことをさしたものであろう。

江戸の町の約6割は武家地。2割は寺社地。町人が住む場所は、わずか2割にすぎなかったといわれている。だが、江戸の情緒というものは、その2割の町人たちの生活から生まれたものといってよい。

そのころの、江戸の町民たちの暮らしは、貧富の差なく、特別の災害をうけぬかぎり、まことに暮しよかったのではあるまいか。幕府の民政は融通がきいていて、白でなければ黒ときめつけるようなことは、みじんもなく、それがまた町民の生活へ敏感に反映したのである。

清明な、いさぎよい、自分を押しつけることなく、つつましやかに、日々を生き生きと過ごすことを、江戸人は念願とした。



(2017年10月29日)

@掲載した地図の色分けは、紫「大名屋敷・用地」、緑「一般武家屋敷」、
黄「町家」、赤「神社」、茶「仏閣等」